



TITLE:

京大広報 No. 368

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 368. 京大広報 1989, 368: 659-674

ISSUE DATE:

1989-04-01

URL:

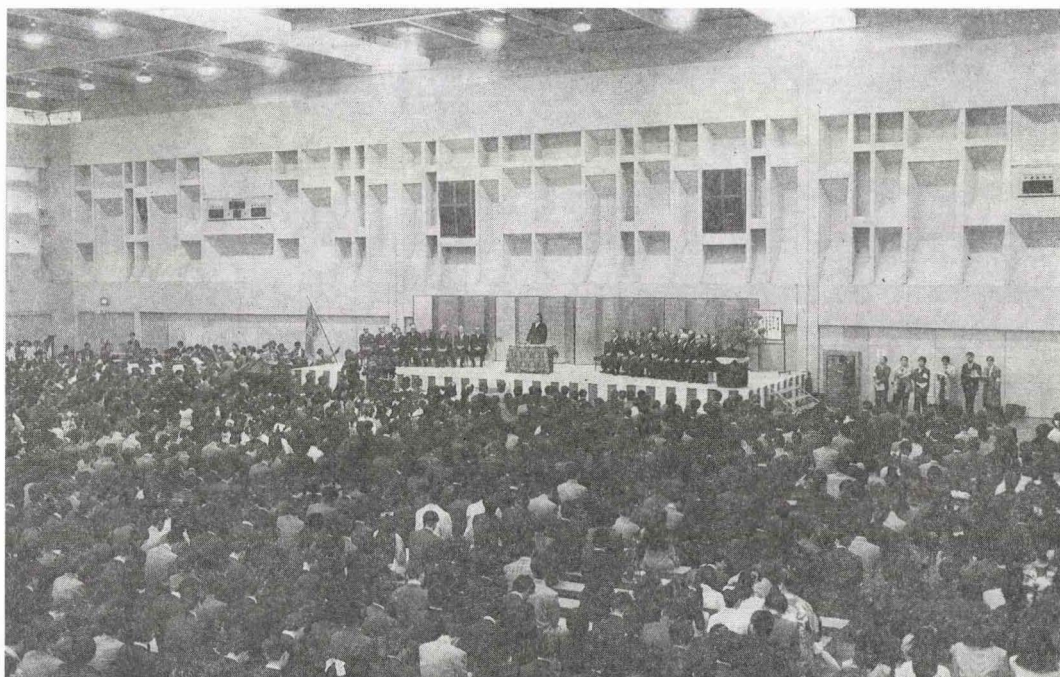
<http://hdl.handle.net/2433/209310>

RIGHT:

京大広報

No. 368

京都大学広報委員会



昭和63年度卒業式

—関連記事本文666ページ—

目次

修士学位授与式における総長の ことば 総長 西島 安則…… 660	佐伯 富名誉教授、日沼頼夫名誉教授が恩賜賞・ 日本学士院賞を、超高層電波研究センター長 加藤 進教授が日本学士院賞を受賞…… 669
卒業式における総長のことば 総長 西島 安則…… 663	＜紹介＞
昭和63年度修士学位授与式…… 666	教育学研究科臨床教育学専攻…… 671
昭和63年度卒業式…… 666	訃 報…… 672
部局長の交替等…… 667	＜資料＞
平成元年度入学者選抜学力試験の結果…… 668	昭和63年度教育実習実施状況…… 672
平成元年度医療技術短期大学部 入学試験の結果…… 669	＜随想＞
昭和63年度医療技術短期大学部の 卒業式・修了式…… 669	存者且儆生 名誉教授 野崎 一…… 674

修士学位授与式における総長のことば

平成元年 3 月 23 日

総 長 西 島 安 則

本日ここに名誉教授の先生方の御臨席を賜り、部局長の先生方、教職員の皆様と共に、昭和63年度の修士の学位授与式を挙行し、文学研究科78名、教育学研究科17名、法学研究科15名、経済学研究科32名、理学研究科153名、薬学研究科41名、工学研究科598名、農学研究科141名、合計1,075名の諸君に修士の学位を授与することができました。新修士諸君、おめでとう。

昭和28年（1953）に京都大学に新制度による大学院が開設され、昭和30年（1955）3月に大学院修士課程修了者の第1回の修士学位授与式が行われて以来、今日新たに修士の学位を取得された諸君を入れまして、本学はこれまでに24,970名の修士を世に送り出しました。

諸君はそれぞれの研究科において、専攻分野の基礎を学び、そして一人ひとり研究課題をもって、研究の楽しさ、学問の深さを十分に味わって課程を修了しました。2年前に諸君を迎える大学院入学式におきまして、私は

「研究は、その水準が高ければ高いほど個性的であります。京都大学の自由な学風のなかで、自分を磨いてください。諸君の大学院での学問の攻究が、人類の将来に真の希望をもてる喜びにつながるよう、心から期待しております。」

と言って、歓迎の言葉を結びました。〔京大広報、No.331〕そしてそれから早や2年、今日、諸君を送り出す日を迎えました。

今日はフレデリック・サンガー（Frederick Sanger, 1918～）のことを少し話したいと思います。サンガーのことは知っている諸君も多いかと思いますが、彼はインシュリン（Insulin）の中のアミノ酸の配列をはじめて完全に明らかにし、生命科学の分野の発展における分子生物学の基礎をしっかりと固めるという大へん重要な役割を果たした学究の人です。昨年彼は「SEQUENCES, SEQUENCES, AND SEQUENCES」と題する巻頭論文を*『Annual Review of Biochemistry』に書いています。彼は1918年生れで満70歳です。彼の40数年の研究生活を振り返っているこの論文は、研究の先達としてはいうまでもなく、さらに一人の学究の人の文章として大へん味わい深いものがありますので、それを引用しながら諸君のこれからの活躍に対するはなむけの言葉にしたいと思います。

私は、今日この修士の学位授与式において生化学（Biochemistry）の歴史を講義するつもりはありませんが、ごく簡単にサンガーに至るまでのこの分野の学問の背景を述べておきましょう。

生命の仕組みを化学をもって攻究しようとするこの学問が緒に就いたのは、19世紀の中頃です。タンパク質のことをプロテイン（Protein）と呼びますが、その語源はギリシャ語の *proteios*

(=primary) です。生体の生命現象において第一義的な大事な役割を担っているものとして、スウェーデンの化学者ベルセリウス (Jöns Jakob Berzelius, 1779~1848) によって、このように命名されたのです。それは、1838年で、今から150年前のことでした。

それからまもなく、ヨーロッパでの化学の勃興のときを迎え、リービヒ (Justus Freiherr von Liebig, 1803~1873) や、ヴェーラー (Friedrich Wöhler, 1800~1882), そしてケクレ (Friedrich August Kekulé, 1829~1896) らによって有機化学の基礎が、主としてドイツの大学を中心として固められました。そしていよいよ、生命を支える物質、また、生命現象へ化学者の研究の目がむけられるようになったのであります。19世紀の末になって1899年に、エミール・フィッシャー (Emil Fischer, 1852~1919) はタンパク質の化学の研究を本格的に始めました。それから20年、彼はこの生命科学の未知の世界へ大きな一步を踏み出しました。タンパク質の化学構造はアミノ酸が結合してつながっている分子鎖であるということを解明したフィッシャーは、1906年にその基本的化学構造にポリペプチド (Polypeptides) という名前をつけ、これが植物、動物すべての生物系で重要な役割をする分子であることを明らかにしました。しかし、このタンパク質の分子は、それまでの化学者が扱ってきた化合物に比べて、大へん複雑で多様な構造をしており、また、不安定で、その頃までに確立された化学の伝統的な研究方法では、それ以上その構造を明らかにし、また、さらに生命の仕組みの中での役割を研究することは極めて困難でした。

一方、ちょうどその頃ロシアの植物学者ツヴェート (Mikhail Semenovich Tsvet, 1872~1919) はワルシャワの大学で葉緑素 (chlorophyll) などの植物色素の研究をしていましたが、1906年にクロマトグラフィー (Chromatography) という色素分子の分離方法を見出しました。クロマトグラフィーとは“色で描く”という意味のギリシャ語から彼が命名したものです。吸着剤の入った円筒 (カラム) に植物色素を溶かした溶液を流し込むと、それぞれの色素が層に分離して文字通り色で成分を分別して見ることが出来るという新しい方法の開発でした。この研究方法の有効性を積極的に評価したのは、ドイツの有機化学者ヴィルシュテッター (Richard Martin Willstätter, 1872~1942) でした。1940年代になって、このクロマトグラフィーは、ケンブリッジ大学の化学者マーチン (Archer John Porter Martin, 1910~) とシンジ (Richard Laurence Millington Syge, 1914~) らによって、ろ紙の上に展開することで少量の試料でも精密に分離できるペーパークロマトグラフィーとしてさらに開発されました。

このように有機化学の基盤が充実し、また、新しい研究方法の開発が進んだちょうどその頃に、サンガーは生化学の分野を志してケンブリッジで研究を始めたのです。ケンブリッジ大学の学部へ入学した時、自然科学の学生は主専攻、副専攻をあわせて3つの科目を選ばねばなりませんでした。彼は2つ半 (two-and-a-half subjects) の科目を選んだ後で、あとの半科目 (half subjects) のリストから何にしようかと探しておりました。ふと生化学 (Biochemistry) という科目が目にとまりました。彼はそれまでに Biochemistry という科目名を耳にしたことがありませんでした。しかし、生物学 (Biology) を化学 (Chemistry) によって攻究する分野という説明に興味をもって、彼はこれを半科目として取ることにしました。1935年に学部を卒業して博士課程へ進学しました。そして1940年から1983年に退官するまで、40余年間この分野の研究に没頭することになったのです。

彼のエッセイ「SEQUENCES, SEQUENCES, AND SEQUENCES」は、こんな具合に始まっています。

「この分野の長老が、巻頭論文を書く場合、普通は研究 (Research), 教育 (Teaching), そして学術行政 (Administration) の3つの分野での経験を書くのが習わしになっているのだが、私にとって後の2つ、教育と学術行政については大へん簡単である。というのは、自分がこの2つについてはほとんど何もしなかったし、また、したくなかったからずっとそれらを避けてきたのである。考えてみれば私はこれまで、研究だけに没頭し、またそれを楽しんできた。」

そして、彼は研究についてこのように言っています。

「およそ科学の研究というものには3つのアクティビティがあると思う。すなわち、考えること (thinking), 話すこと (talking), そしてやること (doing) である。私はこの中で最後の doing が大好きである。そしてたぶん doing ということが私にとって一番よくあっていた。thinking もまあ悪くはないが、talking はあまり得意ではなかった。化学者として私は doing すなわち実験をすることに没頭してきたのである。」

1940年から研究者として研究を始め、10年以上かかって1955年に彼は膵臓 (pancreas) から分泌されるホルモンタンパク質であるインシュリンの51個のアミノ酸の並び方を完全に決定することに成功しました。そしてこの仕事はベルセリウスがタンパク質を命名してから115年、そしてエミール・フィッシャーがそのポリペプチドという有機化学的構造を研究し始めてから50年を経て、はじめてタンパク質がきちんと定まった分子構造を持つポリペプチドの分子鎖であることをしっかりと証明したものです。これが戦後の分子生物学の大きな発展の端緒となりました。

ときにサンガー37歳でした。彼はペーパークロマトグラフィーなどの最新の分別方法を用い、また酵素 (Enzymes) を使ってポリペプチドを特定の所で切断するといったような新しい手法などをいろいろ活用しましたが、しかし、基本的には構造決定は19世紀の有機化学から伝統的に確立された方法でこつこつと進め、この仕事を完成するのに10年かかったのです。

この偉大な仕事を完成しつつあったサンガーに、人々はよく「この大仕事が終わったら次に何をしようとするのか」と聞きました。彼は「構造が決定されるということはまだまだほんの入口で、次の仕事はその構造が何を意味するのか、そしてそれがどう機能するのかということであり、これからそれを攻究するのだ」と返事していました。彼は分子生物学のその後の展開について、確固たる考え方と展望を持っていました。しかし、それにもかかわらず、その道はまだまだ遠いものでした。彼は研究生活を振り返って、インシュリンの配列を完全に決定した1955年以降の数年を不作の年 (The Lean Years) と言っています。諸君もこれから研究をしたり、あるいは何か事業に没頭して、それが一つの大きな成果を取めた後に、この不作の年を経験することがあると思います。彼はこのように言っています。

「一番大事なことは、そういうときにはずっと先の展開をいつも考えることだ。」

事実、彼はこの彼の言う不作の年の間にその後の大きな研究へのエネルギーの蓄積をしました。RNA や DNA の研究への準備を着々と進めています。そしてそれは1960年代になって大きく展開しました。

彼は彼自身の研究人生を振り返ってみて、

「研究者自身にとっては、そんなに突然のブレイク・スルーや、あるいはある日、急にインスピレーションが湧いて大きく研究が進むものではなくて、一つひとつのステップを登って、一步一步その目標に進んでいくもので、自分はその一步一步の喜びが研究の楽しみであった。私にとっては急な大きな飛躍よりもその一步一步の喜びがもっと大事なものだと思っている。」

と述懐しています。

最近、独創的な研究ということで何か急に生まれる画期的な成果のみを期待する傾向があります。外から見れば画期的な成果が急に現れたり、あるいはスランプが続くといったように見えるかもしれませんが、研究者自身の内的な知的営為は、不断に続けられているのです。そしてそれでこそはじめて真の学究の人ということができるのです。

「40数年の間、私は本当に素晴らしい研究の機会を与えられました、私には私の “wildest dreams” のいくつかを実現するチャンスに恵まれました。」

とサンガーは彼の文章を結んでいます。

今日、諸君の門出のときに当って、一人の真摯な研究者、フレデリック・サンガーのことを話しました。彼は決して派手な成果を求めた研究者ではありません。学問の大きな流れの中で、若い彼自身が、まず固めるべきであると考えた基礎課題に、勇猛心をもって地道に一步一步立ち向って行きました。そして、彼が到達した研究成果はこの分野の基盤を固め、顕著な分子生物学の発展への強いインパクトとなりました。彼が若いときからもち続けた “wildest dream” が、彼の研究遂行への勇気の源ではなかったかと思います。この wildest という表現の中に、野生的ともいえるほど強烈な、人間の本性である純粋な真理への探求心を読むことができます。

諸君、自分の心中に wildest dream を抱き、勇気をもって、これからの人生を力強く歩んで下さい。諸君の充実した輝かしい人生を心より期待しています。

* Annual Review of Biochemistry, Vol. 57, 1~28 (1988)

卒業式における総長のことば

平成元年 3 月 24 日

総 長 西 島 安 則

諸君、卒業おめでとう。

ここに名誉教授の先生方の御臨席を賜り、部局長の先生方、教職員の皆様と共に、昭和63年度の卒業式を挙行することができましたことは京都大学の最も大きな慶びとするところであります。

ただ今、文学部182名、教育学部55名、法学部346名、経済学部233名、理学部278名、医学部114名、薬学部73名、工学部858名、農学部281名、合わせて、2,420名の諸君に合格証書を授与いたし

ました。諸君は最高学府、世界の学問の府である京都大学を立派に卒業しました。ここに諸君と慶びを共にするとともに、これまで永い年月にわたり諸君の学業を支えてくださった多くの方々に、諸君と一緒に心から感謝いたしたいと思います。

京都大学の卒業生は、旧制の時代に49,712名、新制になりましてから、本日卒業された諸君を加えて76,359名となりました。明治30年（1897）の本学創設以来卒業生の総数は126,071名であります。それぞれの時代、それぞれの分野で本学の卒業生は、自由の学風を身につけ、個性的でたくましい創造の力を持って活躍してこられました。92年の本学の歴史は、決して坦々たるものではありませんでした。しかし、本学におけるたゆみない基礎的かつ極めて水準の高い研究の遂行、自由な発想による学問の展開とそしてその総合、その中で研究と一体となった教育の伝統、さらに、卒業生の方々の世界の学界、国際社会での活躍、それらが一体となって、世界の中の学問の府としての今日の京都大学が作られてきたのであります。

今日、諸君の門出に当たって、「陽の当たるところに群がるな」ということをはなむけの言葉としたいと思います。おめでたい卒業式でのお祝いの言葉としては、いささか厳し過ぎる言葉かとは思いますが、学問の将来、そして人間社会のこれからの時代を担う諸君に、この上ない親愛の情と大きな期待をもって、あえてこの言葉を贈りたいと思います。

京都大学の歴史はまだ百年に満ちません。来る1997年、あと8年後に本学は創立百周年を迎えます。しかし、学問の府としての京都大学の学風は、もっと長い日本の文化、そして世界の文明の流れの中で培われてきたのです。

諸君が京都で学ぶ間に、京都のまちをあちこち散策したと思いますが、大学のすぐ近くにある慈照寺の銀閣は15世紀の末1483年から89年、今からちょうど500年前に建立されました。その頃、イタリアではルネッサンスの最盛期でした。レオナルド・ダ・ヴィンチ（Leonardo da Vinci, 1452～1519）が活躍したのはその頃です。そして、やがて自然を客観的に観察し、そして数学を言語として記述するという自然科学の思想が自然を見る人間の目を大きく変えました。コペルニクス（Nicolaus Copernicus, 1473～1543）が『天球の回転について』と題する本を刊行したのは1543年です。ケプラー（Johannes Kepler, 1571～1630）、ガリレイ（Galileo Galilei, 1564～1642）、そしてニュートン（Issac Newton, 1642～1727）らの、新しい宇宙観によって、天空と地上を統一した力学体系の確立へと進みました。学問の流れにたとえるなら、私はこの時代を瀧の時代と名付けたいと思います。新しい自然観が大きな統一と総合によってその基盤を固めると同時に新しい科学の基本的課題を明確に打ち出した時代でした。

この瀧の時代を経て人間の自然観は大きく変わりました。その次に来た時代は、淵の時代とたとえられると私は思います。ラグランジュ（Joseph Louis Lagrange, 1736～1813）やラプラス（Pierre Simon Marquis de Laplace, 1749～1827）らの数学者によって数学は著しく進歩し、瀧の時代の成果である力学的宇宙観は、18世紀の終りから19世紀にかけて、完璧なまでに研ぎすまされたので

あります。一方、物質の構造と変換についての学問にも永い混沌とした歴史を越えて最初の扉が開かれました。200年前のフランス革命に散ったラヴォアジエ (Antoine Laurent de Lavoisier, 1743~1794) からドールトン (John Dalton, 1766~1844) へと、この淵の時代に物質の構造と性質について新しい化学的原子の概念が確立されてきました。

この淵の時代にその深い底で渦巻きながら蓄積された人類の知的エネルギーは、19世紀になって激しい勢いで流れだしました。私はこれを急湍の時代と名付けたいのです。それまで深い神秘のベールの奥にあった生命の秘密も、19世紀の中頃過ぎには、顕微鏡下での細胞分裂の観察から、ミクロの世界での生命の仕組みが次第にわかり始めました。また、ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809~1882) の『種の起源』(1859) が社会に衝撃を与えたのもこの頃でした。

化学はこの間に大きく進歩し、それまでの物理学と化学の境界を越えた学問領域を生むことになりました。生物と無生物が共通の化学的原子や分子の言葉で語られる時代に入りました。また、それまで手で触れたり目で見たりする物質に加えて、光や熱、電気や磁気などが研究対象になり、17世紀の瀧の時代から続いてきた光の本性についての学問を軸として、新しい物理学の展開が見られました。このような中で、基礎学問は技術への結合を深めてきたのです。エネルギーの転換の科学と技術は、新しい工業化社会への原動力となり、人間社会のあり方、人の生き方、そして考え方を激しく変えつつありました。まさに急流が岩を噛む急湍の時代でありました。

19世紀から20世紀へ、この急湍はさらに勢いを強め流れを急激に拡大しつつ、奔流の時代に入ったと言えると思います。京都大学が創設されたのは、そのような奔流のほとばしり始める19世紀の末であります。

藤澤令夫教授 (文学部哲学科) は、*『哲学の基本的課題と現実的課題』と題する文章に、現代の状況を次のように述べておられます。

“さしあたって注目せざるをえないのは、この自然科学の現状が示している二つの側面である。すなわちその一つは、自然科学が専門的細分化の道を進んできたその先で、「物質」「生命」「人間」といった古来の伝統的テーマについて現在到達しつつある知見そのものの新たな内実と動向であり、もう一つは、科学の技術的応用—いわゆる“科学技術”—という別の側面がいま呈している、独得の様相とその波及効果である。”

さらに、

“とくにこの半世紀たらずの間に際立って顕著になった事態は、……科学技術の開発ということだが、産業社会の強固なメカニズムの中に基盤装置として完全に組みこまれて体制化され、その動きは経済成長という至上のポリシーによって加速されつつ運動量を増し、巨大な奔流となつてとどまるところを知らずに進行していることである。”

そして、

“自然環境から人工的環境へのこの大がかりな変化は当然、たんなる外的な環境のことだけにとどまらず、そのなかに生きて行動する人間の仕事の質を改変し、人間関係のあり方を改変し、そ

して人間そのものを改変しようとしている。”

諸君の卒業に当たり、あえて「陽の当たるところに群がるな」と言いましたのは、諸君が本学で学び身につけた、純粋でそして自由な、知を愛する学問の心と美を楽しむ感性を大事にして、しっかりとした専門的基礎知識をこれからより拡がりのある、より全体的な知性へと磨いてほしいと切に望むからであります。今の社会の、特に日本がそうであるかと思いますが、社会全体に拡がっている最先端至上主義的な風潮の中で、ややもすれば、短期的な目先の価値評価によって、いわゆる脚光を浴びている陽の当たるところに人々が群がる傾向が強いように思います。今、諸君が持っている清新な意欲を、諸君自身がこれからの生き方の中でいつまでも大事にして、いかに生きるべきか、何をなすべきか、ということをも自分でしっかりと考え、行動してほしいのです。私は、17世紀から20世紀への科学の流れを、瀧の時代、淵の時代、そして、急湍の時代を経て奔流の時代というようにたとえました。今、人間社会はこれまでの歴史の中で最も切実に真の知性を必要としていると思います。奔流の時代が、やがて人々がよりよく生きることを大事にする時代、悠々たる大河の時代に成熟するには、まだいくつもの基本的な問題が横たわっています。しかし、私は自由な知性こそが人間の社会の将来に真の成熟を約束するものだと思います。

京都大学を卒業する諸君の一人ひとりの力強い、しっかりとした生き方を心から期待しております。

* 藤澤令夫；「哲学の基本的課題と現実的課題」、新岩波講座
哲学1『いま哲学とは』、岩波書店、1985。



＜大学の動き＞

昭和63年度修士学位授与式

3月23日（木）午前10時から、昭和63年度修士学位授与式が、本学総合体育館で挙行された。

学位授与式は、名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに学位記授与が行われ、「総長のことば」があつて午前10時55分終了した。

本年度の修士課程修了者は、文学研究科78名、教育学研究科17名、法学研究科15名、経済学研究科32名、理学研究科153名、薬学研究科41名、工学研究科598名、農学研究科141名の計1,075名であった。

昭和63年度卒業式

3月24日（金）午前10時から、昭和63年度卒業式が、本学総合体育館において挙行された。卒業式は、名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに行われ、学歌斉唱（京都大学音楽部交響楽団、京都大学合唱団の協力）、学士試験合格証書授与、「総長のことば」のあと、「蛍の光」を斉唱して、午前10時50分に終了した。

新学士は、文学部182名、教育学部55名、法学部346名、経済学部233名、理学部278名、医学部114名、薬学部73名、工学部858名、農学部281名の計2,420名である。

部局長の交替等

附属図書館長

西田龍雄文学部教授（言語学講座担当）が4月1日附属図書館長に再任された。任期は平成4年3月31日までである。

文学部長

岡 照雄文学部教授（英語学英文学第一講座担当）が4月1日文学部長に再任された。任期は平成2年3月31日までである。

法学部長

川又良也法学部長の任期満了に伴い、その後任として北川善太郎法学部教授（民法第二講座担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

理学部長

長谷川博一理学部長の任期満了に伴い、その後任として日高敏隆理学部教授（動物系統・遺伝学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

医学部長

内野治人医学部長の任期満了に伴い、その後任として井村裕夫医学部教授（内科学第二講座担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

医学部附属病院長

戸部隆吉医学部附属病院長の任期満了に伴い、その後任として河合忠一医学部教授（内科学第三講座担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

工学部長

神野 博工学部長の任期満了に伴い、その後任として得丸英勝工学部教授（機械電子制御論講座担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

教養部長

新田博衛教養部教授（芸術学担当）が4月1日教養部長に再任された。任期は平成2年3月31日までである。

人文科学研究所長

尾崎雄二郎人文科学研究所長の任期満了に伴い、その後任として谷 泰人文科学研究所教授（社会人類学研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

ウイルス研究所長

田中春高ウイルス研究所長の任期満了に伴い、その後任として由良 隆ウイルス研究所教授（遺伝学研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

放射線生物研究センター長

岡田重文放射線生物研究センター長の任期満了に伴い、その後任として武部 啓医学部教授（分子腫瘍学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成3年3月31日までである。

超高層電波研究センター長

加藤 進超高層電波研究センター教授（超高層物理学研究部門担当）が4月1日超高層電波研究センター長に再任された。任期は平成3年3月31日までである。

学生部長

河合隼雄学生部長の後任として、佐野哲郎教養部教授（英語担当）が4月1日任命された。任期は平成2年3月31日までである。

平成元年度入学者選抜学力試験の結果

平成元年度入学者選抜学力試験合格者の入学手続が3月31日（金）に完了した。

学部別の受験者数、合格者数及び入学者数等は次表のとおりである。

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	(C) 倍率 (B/A)	(D) 第1段階選 抜合格者数	(E) 受験者数	(F) 倍率 (E/A)	(G) 欠席者数	(H) 欠席率 (%)	(I) 合格者数	(J) 追加合 格者数	(K) 入学者数
文 学 部	220人	人		人	人		人		人		225人
前 期	190	849	4.5	762	745	3.9	17	2.2	221		
後 期	30	327	10.9	213	133	4.4	80	37.6	31		
教育学部	60										67
前 期	40	204	5.1	164	157	3.9	7	4.3	57		
後 期	20	161	8.1	140	102	5.1	38	27.1	21		
法 学 部	400	1,830	4.6	1,445	1,425	3.6	20	1.4	423		415
経 済 学 部	240										251
前一般	140	507	3.6	507	482	3.4	25	4.9	170		
期論文	60	592	9.9	270	262	4.4	8	3.0	70		
後 期	40	310	7.8	215	134	3.4	81	37.7	72		
理 学 部	306									21	306
前 期	276	1,533	5.6	1,478	1,445	5.2	33	2.2	301		
後 期	30	1,326	44.2	1,275	1,101	36.7	174	13.6	30		
医 学 部	120										124
前 期	110	682	6.2	550	537	4.9	13	2.4	140		
後 期	10	179	17.9	156	122	12.2	34	21.8	10		
薬 学 部	80										92
前 期	50	189	3.8	189	177	3.5	12	6.3	68		
後 期	30	170	5.7	170	114	3.8	56	32.9	36		
工 学 部	1,030									7	1,031
前 期	617	2,605	4.2	2,168	2,140	3.5	28	1.3	639		
後 期	413	2,044	4.9	1,780	1,280	3.1	500	28.1	472		
農 学 部	325										340
前 期	260	1,010	3.9	916	894	3.4	22	2.4	296		
後 期	65	513	7.9	513	392	6.0	121	23.6	78		
小 前 期	1,743	8,171	4.7	7,004	6,839	3.9	165	2.0	1,962		
後 期	638	5,030	7.9	4,462	3,378	5.3	1,084	24.3	750		
計 B	400	1,830	4.6	1,445	1,425	3.6	20	1.4	423		
計	2,781	15,031	5.4	12,911	11,642	4.2	1,269	9.8	3,135	28	2,851

(注) 1. 受験者数・欠席率は最終教科のものである。

2. 法学部と経済学部（後期）の合格者数には、外国学校出身者のための選考試験の19名と7名とがそれぞれ含まれ、また、両学部の入学手続者数には、両選考試験の16名と5名とがそれぞれ含まれている。

平成元年度医療技術短期大学部 入学試験の結果

平成元年度医療技術短期大学部入学試験の合格者氏名が、3月16日（木）に発表された。

受験者数及び合格者数等は次表のとおりである。

学 科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
看護学科	80人	246人	215人	88人
衛生技術学科	40	270	230	44
理学療法学科	20	144	120	23
作業療法学科	20	93	82	23
計	160	753	647	178

（医療技術短期大学部）

昭和63年度医療技術短期大学部 の卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月17日（金）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓の臨席のもとに、短期大学部卒業式及び修了式を挙行了。式は卒業証書・修了証書授与、学長式辞、来賓祝辞と進行し、午前11時終了した。卒業生は、看護学科81名、衛生技術学科42名、理学療法学科19名、作業療法学科18名で、修了生は、専攻科助産学特別専攻20名の計180名であった。

（医療技術短期大学部）

佐伯 富名誉教授、日沼頼夫名誉教授 が恩賜賞・日本学士院賞を、超高層電 波研究センター長 加藤 進教授が日 本学士院賞を受賞

このたび、佐伯 富^{さへき とみ}名誉教授、日沼頼夫^{ひぬまよりお}名誉教授に恩賜賞・日本学士院賞が、超高層電波研究センター長加藤 進^{かとうすすむ}教授に日本学士院賞がそれぞれ授与されることになった。授賞式は、6月上旬、日本学士院会館で行われる予定である。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。

佐伯 富 名誉教授



佐伯名誉教授は香川県出身、昭和10年京都帝国大学文学部を卒業、東方文化学院京都研究所嘱託、東方文化研究所助手、京都帝国大学人文科学研究所助手を経て、昭和17年山口高等商業学校教授、昭和24年京都大学助教授（文学部）となり、昭和32年教授に昇任し、東洋史学第三講座を担当した。昭和49年本学を停年退官して、現在に至っているが、昭和50年から1年間、台湾大学客員教授に招かれた。

教授の今回の受賞の対象になった業績は、『中

国塩政史の研究』（昭和62年）である。塩の専売制度は中国史において極めて重要な研究課題であるが、資料が膨大であり、制度が複雑であるために、その実態はこれまでほとんど明らかでなかった。教授は大学卒業以来、あえてこの難解な課題に取り組み、まず昭和31年に『清代塩政の研究』を著し、前人未踏の分野を切り開いたものとして学界の高い評価をうけた。その後もこの研究をすすめ、対象の時代を遡って、ここに中国古代から清末までの塩政通史を完成した。これは世界ではじめての画期的な業績である。この研究によって、塩が国家の興亡と密接な関係にあり、とくに塩の専売収入が宋代以後の独裁政治を支える財源として重きをなしたこと、専売の独占権を得た塩商が発展して社会に強固な基盤を築き、彼らが文化の興隆にも寄与したこと、統制がきびしくなると、私塩が横行し、その密売者が秘密結社をつくって社会を動揺させたことなど、塩の中国史における重要性が明確になった。

教授はほかにも、塩と並ぶ専売品であった茶について『宋代茶法研究資料』（昭和16年）を著し、また中国近世の政治制度、社会経済の多方面にわたる数多くの論文は『中国史研究』第一、第二、第三（昭和44、46、52年）に収められている。さらに『中国随筆索引』（昭和29年）をはじめ30余種の索引類を編纂刊行して、中国史学の発展に大きく貢献した。これらの数々の輝かしい業績は、

国際的にも高い評価をうけてきた。

教授は、本学において30年にわたって熱心に教育にたずさわり、学問のきびしさと不断の努力の必要とを身をもって示し、多くのすぐれた研究者を指導育成した。

以上のような研究教育における輝かしい業績を考えると、教授の今回の受賞はまことに慶ばしいことである。

なお、昨年度に受賞が内定していたが、批判する者があったため、日本学士院は再審査を行い、あらためてその業績を高く評価して、今回の受賞となった。

(文学部)

日沼 頼夫 名誉教授



日沼名誉教授は秋田県出身、昭和25年東北大学医学部を卒業し、3年間の旧制大学院の後、同29年同大学医学部助手となり、同33年米国フィラデルフィア小児病院ウイルス研究所に留学した。昭和35年東北大学医学部助教授、昭和40年米国ローズウエルバーク記念研究所客員教授を経て、昭和43年東北大学歯学部教授、昭和46年熊本大学医学部教授となり、昭和55年京都大学ウイルス研究所教授に就任した。昭和62年より同研究所長を務め、昭和63年本学を停年退官して、現在シオノギ医科学研究所の所長として活躍している。

教授の今回の受賞の対象になった業績は、「成人T細胞白血病のウイルス病因に関する研究」である。成人T細胞白血病(ATL)は日本の南西部に多い悪性疾患であるが、その原因は長い間不明であった。教授は、京大ウイルス研究所着任後すぐ、このATLの研究を始めた。ATL由来の細胞株に、ウイルス特異的抗原が発現されており、これに対する抗体がATLの患者にほぼ100%見い出されることから、ATLがウイルスによる疾患であることを報告した。この発見により、ATLの原因ウイルスが確認され、ヒト癌の原因となるウイルスの最初の発見となった。現在、世界中の多くの学者がこのウイルスに関する研究に

従事していることから、この発見の意義の大きいことがわかる。これらの高い国際的評価に基づき、第3回ペーリング・北里賞、第3回米国ハマー賞など数々の国内外の賞を受けた。また昭和61年には文化功労者として選ばれている。同教授の学問的関心の範囲は広く、このウイルスの独特な性状に基づいて日本人の起源をも問う研究を進め、これについて「新ウイルス物語」の著書がある。これらの研究を通じて育てられた多くの若い研究者は、現在各分野で活発に研究活動を行っている。

以上のような研究・教育の両面にわたる輝かしい業績を考えると、教授の今回の受賞はまことに慶ばしいことである。

(ウイルス研究所)

加藤 進 教授



加藤教授は埼玉県出身、昭和27年京都大学理学部地球物理学科卒業後、同大学院で超高層物理学を専攻した。32年京都大学工学部電子工学科助手に採用され、34年同講師に昇任、36年創設の工学部附属電離層研究施設

助教授、42年教授に昇進。56年同研究施設が学部より独立した京都大学超高層電波研究センターに改組されて以来、教授兼センター長。オーストラリア政府研究所(CSIRO)客員研究員(昭和37~39)、米国大気物理研究所(NCAR)客員研究員(昭和42~43)、カリフォルニア大学客員教授(昭和48~49)を務めた。

今回受賞の対象となった研究業績は「大気潮汐並びに大気重力波の研究」である。大気潮汐は地上の微気圧変動の規則的半日周期性及び電離層電流に起因する地磁気の規則的一日周期性として古くから知られ、理論的研究も行われていた。しかし1960年代に入り、ロケットによる温度の直接測定により、従来の理論の基礎に誤りのあることが分かった。加藤教授は大気潮汐の特異な振舞いは従来未知であった大気潮汐振動の構造によることを理論的に解明し、地球規模の大気波動一般の構造の解明の緒を与え、その後の大気力学の発展に

大きな貢献をした。

加藤教授は1970年代、中層大気観測用大型レーダーの建設を計画し、昭和59年その実現に成功した。この MU レーダーは高速でビームの方向変換が可能である等世界の最先端のシステムである。これを用いて、中層大気力学、特に大気重力波の伝搬、碎波、乱流の観測、研究が同教授を中心に進められつつあり、中層大気力学に新しい発展をもたらしている。1987年同教授のこれらの業績に対し、英国王立協会 (Royal Society) より日本人として初めてアップルトン賞が贈られた。

加藤教授は地球電磁気・地球惑星圏学会長をつとめた他、同評議員、測地学審議会委員、国際的には SCOSTEP (太陽地球系物理学科学委員会) 専門委員等として活躍している。地球電磁気・地球惑星圏学会賞 (昭和34)、同長谷川記念杯 (昭和62)、山路自然科学奨励賞 (昭和49) を受賞した。

以上のような研究教育における輝かしい業績を考えると、教授の今回の受賞はまことに慶ばしいことである。

(超高層電波研究センター)

＜紹 介＞

教育学研究科臨床教育学専攻

昭和63年度より、本学大学院教育学研究科に臨床教育学専攻が独立専攻として設置された。この専攻は、心理的・教育的に問題をもつ青少年とその家族の諸問題をめぐって、これまで教育学部の心理教育相談室が行ってきた教育相談の実践をふまえ、臨床心理学と教育学を統合した、より包括的で実践的な青少年の人格研究と、心理・教育相談の臨床経験に基づく教育理論の発展を目的とし、あわせて高度の教育相談の専門家の養成と再教育を行うためにつくられたものである。

周知のように、現在わが国の教育界は、社会の急激な変化に伴う青少年の人格発達と教育上のさまざまな困難に直面しており、各種の非行や登校拒否、家庭内暴力、思春期拒食症といった新たな青少年問題に対処するために、総合的な研究と実際的な教育相談活動の充実、専門的なカウンセラーの養成が緊急の課題となっている。また、教育関係者や社会福祉・医療関係者の間では、心理・教育相談活動の質的な向上を目ざして、大学院レベルの研修や再教育を希望する者が年々増加している。

一方、わが国の大学における心理・教育相談の研究と教育は、これまで主として臨床心理学と教育学がそれぞれ別個に行っており、このため実際の相談活動においても、カウンセラー相互の理解と協力に欠ける憾みがあった。

しかし、臨床心理学に関していえば、何らかの困難や問題をもつ子どもとの現実の相談活動においては、子どもはカウンセラーの存在自体によって影響を受けざるをえない。このため、臨床心理学は子どもの経験している生活世界と教育的状況について常に多面的・総合的に考慮する必要があり、特に子どもを周囲の成人たちとの関係におい



心理療法実習での討論風景

て全体的・形成的に理解しようとする教育学的志向と自覚を持つ必要がある。また、教育学の側からいえば、教育学はこれまで学校教育を中心とする意図的・制度的な教育に関心が偏り、平均的な発達過程から逸れたものは例外的ないし病理的なものとして医学や臨床心理学に委ねる傾向があったが、意図的・制度的な教育の根底には、多様な日常の人間関係を通じて絶えず無意図的な人間形成が行われているため、青少年の全人格的な成長を助成するためには、この日常の生活の深層の分析と無意図的な形成に対する配慮を含んだ全体的な人間の理解が不可欠である。したがって、教育学の方も従来は医学や臨床心理学の対象とされてきた青少年の現象を、かえってもっとも基礎的な人間形成、教育の問題として見直すことが必要となる。

臨床教育学専攻は、このような心理・教育相談をめぐる社会的な要請と学問的な反省に基づいて

設置されたものであり、臨床教育学講座、臨床人格心理学講座、臨床教育人間学講座、教育臨床心理学講座の4講座で構成され、大学を卒業して直ちに大学院に進学する者だけでなく、教育・臨床の現場で働く社会人で更に高度の専門的能力を養おうとする者にも、修士課程入学の途を開いている。

また、本専攻の基幹となる大学院講座として新設された臨床教育学講座は、例外的・病理的と見做されてきた青少年やその家族の臨床的な教育相談の経験と知識に基づいて、人間と教育に関する既存の学問的・社会的通念を批判的に問い直し、一般的な教育学を補完する臨床的教育学の理論化を課題とする講座であり、これまでに私立高校校長経験者を含む2名の社会人学生の入学を許可している。

(教育学部)

計 報

百名 盛之（教育学部教授・京都大学工学博士）

3月21日逝去、59歳。昭和34年本学大学院教育学研究科修士課程修了。平成元年3月本学教育学部教授就任。専門は視聴覚教育。

江口 彌（工学部教授・工学博士）

3月28日逝去、59歳。昭和27年本学工学部卒業、40年工学研究所（現原子エネルギー研究所）教授就任、57年工学部教授に配置換え。63年から工学部附属重質炭素資源転換工学実験施設長を併任。専門は化学工学、反応工学、装置工学。

<資 料>

昭和63年度教育実習実施状況

昭和63年度における教育実習は42都道府県にお

よぶ国公私立の高等学校157校、中学校54校、養護学校3校の協力を得て、昭和63年5月から平成元年3月までの間に実施された。

1. 学部別の履修状況

学 部 区 分	文 学 部	教 育 学 部	法 学 部	経 済 学 部	理 学 部	薬 学 部	工 学 部	農 学 部	計
参 加 申 込 者	100人	45人	13人	10人	115人	8人	47人	49人	387人
取 り 止 め た 者	10	4		1	10	1	6	4	36
実 習 終 了 者	90	41	13	9	105	7	41	45	351

2. 実習校の配当方式

学 部 区 分		文 学 部	教育学部	法 学 部	経済学部	理 学 部	薬 学 部	工 学 部	農 学 部	計
京 都 市 配 当	市立中・高校	5人	8人	1人	人	6人	人	2人	4人	26人
	養 護 学 校	1	6			1				8
	取り止めた者	1	3			4			1	9
	実 習 終 了 者	5	11	1		3		2	3	25
出 身 校	出身中・高校	94	31	12	10	108	8	45	45	353
	取り止めた者	9	1		1	6	1	6	3	27
	実 習 終 了 者	85	30	12	9	102	7	39	42	326

(注) 出身校は京都市立以外の国公立校である。

3. 教科別、校種別の人数

学 部 区 分		文 学 部	教育学部	法 学 部	経済学部	理 学 部	薬 学 部	工 学 部	農 学 部	計
国 語	中 学 校	5人	4人	人	人	人	人	人	人	9人
	高 等 学 校	15	5	1						21
英 語	中 学 校	8	4							12
	高 等 学 校	14	10	2	1					27
社 会	中 学 校	6	4	2	1				1	14
	高 等 学 校	42	8	6	7				1	64
理 科	中 学 校					4			11	15
	高 等 学 校					52	7	18	32	109
数 学	中 学 校					4		1		5
	高 等 学 校					44		22		66
保 健 体 育	中 学 校									
	高 等 学 校			2						2
計	中 学 校	19	12	2	1	8		1	12	55
	高 等 学 校	71	23	11	8	96	7	40	33	289
養 護 学 校			6			1				7
合 計		90	41	13	9	105	7	41	45	351

(教職教育委員会)

＜随 想＞

存 者 且 儉 生

名誉教授 野 崎 一



わが転職の感想……昭和16年から44年間に互った京都大学での生活を終え、いまの大学へ移ってはや4年、いつしか「岡山理大の野崎です」という名乗りが平気でできるようになったと思ったら、もう折り返し点である。この間曲がりなりにも研究と教育の延長戦を楽しませて貰ったことに感謝している。幸い理大の「停年坂」の上り下りもまだそれほどには苦にならず、単独の外国旅行も平気なので、平成5年の春まで、ここでの生活をエンジョイしたいと思う。学生の学力はイマイチであるが、老人を大切にしてくれ、特に今年は大木道則、辻 二郎両教授など、有力な同僚が加わって、いまの勤務に不満はない。講座制ではないがルーズな結合ともいうべき研究室制になっていて、研究費は驚くほど潤沢である。昨春には400 MHz 核磁気共鳴装置を私学助成で購入して貰った。原子直視型電顕もある。とはいえ活発な研究室はやはり赤字経営になっているようだ。

ポロニア大学900年祭……その実行委員の一で旧友、A. ファヴァ教授から国際電話があって、このシンポジウムへの参加が思いがけずに決まった。西島総長が出席された会議の前座のような形で、昨年9月13日～15日の間に「大学と現代社会」というテーマのもとに開かれた。近く全講演を1冊の本にまとめて出版するよし。私は「20世紀における日本の大学の役割」について話したが、あとでラジオ記者の探訪を受けた。欧州の大学と較べて余りの特殊性、日本の国力の異常な成長のなかで新しい大学の卒業生が果たした役割などが興味を引いたものようだ。21世紀に向けて、欧州の大学からもっともっと多数のポストドクトラルが日本へ来てほしいと思う。チバガイギー科学振興財

団(福井三郎理事長)の日欧研究者交流事業が大幅な輸出超過で提案者は困っている。

都市国家ポロニアの大学の悩み……同地滞在中、A. ウマニ・ロンキ教授に招かれて理大での研究成果を講演し、余暇に故チャミチャン教授の光化学実験室など見学した。前回訪問の工学部ファヴァ教授の実験室はもっと近代化されていたと思ったが、町の中心により近い理学部の化学では、19世紀の部屋がそのまま残り、使われている。京大工化の赤煉瓦そっくりの実験室を思いだす。といっても今の諸君には判るまいが……イタリア都市国家の雄、ポロニアの大学なるがゆえに、郊外すなわちポロニアの外への移転は許されないので、当分建物の近代化は難しいと嘆いていた。無論室内の実験装置は完全に近代化されており、化学用パソコン・ソフトの新しいのを各種見せて貰った。

スイスでの「大学の日」の行事に出て……工化の先輩、福井三郎先生がスイス連邦工科大学(ETH)から昨秋名誉学位を受けられた。同じくスイスのローザンヌ大学から私にも同様の申し出があり、10月22日の Dies Academicus に出席した。万事フランス語で理解は困難だったが、同じころ学生の登録のガイダンスもあったので、新学期行事の一環であろう。理事長、学長らの挨拶、記念通俗講演、学生、院生(卒業生)に対する州や各地方の賞の授与があり、のち名誉学位の授与が行われた。各学部1名ずつ計5名(内女性2名)が順に登壇、それぞれの学部長による業績説明ののち、学長から学位記を受けた。この間式場ではスイス・ロモンド楽団の吹奏が行事の切れ目ごとに挿入されて彩りを添えた。のち全員が祝盃を挙げ会食をともにして解散した。

日本の大学では儀式が地味すぎて色彩に乏しいように感じる。そのためか構成員の関心も低い。卒業式でもそうだが、欧米の大学の節目、節目の行事に負けないよう、もっと参加意欲を高めるような演出が欲しい。国際化の今日、一考を要するのではなからうか。

(のざき ひとし 元工学部教授 昭和60年退官 専門は有機反応化学)